

フランス人医師ヴィダルの報告「日本の温泉」

須長 泰一

伊勢崎市教育委員会

はじめに

明治5年(1872)に来日したフランス人医師 J・P・I・ヴィダルは、私立新潟病院や富岡製糸場・横須賀造船所などの政府が設立した産業施設に勤務したお雇い外国人である¹⁾。

ヴィダルについては、これまで蒲原宏氏と清水陽人氏により詳細な研究がなされている²⁾が、医学教師として迎えられた私立新潟病院以外では、主に産業医として活動を展開したため、各施設の事業主体とは直接関係しないことから、その活動はほとんど注目をされることがなかったと言っても過言ではない。

ヴィダルは日本で見聞した様々な事象を報告として、フランスの学術誌に発表しており、日本研究という点で極めて独特な軌跡を示している。その中でも、温泉に関しては3編の報告文を著しており、ヴィダルが日本の温泉について、特別な関心を持っていたことを理解することができる。

これまで筆者はヴィダルの箱根温泉郷と熱海温泉に関する調査報告と群馬県の草津温泉と磯部温泉と川原湯温泉に関する調査報告について訳出し、その概要についての紹介を行ってきた³⁾。今回、ヴィダルが実施した全ての温泉調査を総括して、温泉に対する見解を発表した報告「日本の温泉」を訳出し、ヴィダルの温泉研究の一端を紹介してみたいと思う。

1. ヴィダルの経歴と日本での活動

J・P・I・ヴィダルは本名をジャン・ポール・イシドール・ヴィダル (Jean Paul Isidore Vidal), 1830年2月21日、南フランスのオード県サル・シュール・レルス村に生まれた。1848年、リール市の軍

教育病院で外科の研修を受けた後、1853年、モンペリエ大学医学部で博士号を取得した。フランス陸軍の軍医として上海やベトナムさらにアフリカで勤務した後、1867年、陸軍大尉で除隊した。

日本に来日するまでの詳しい経緯は不明であるが、明治5年(1872)7月17日、アメリカ船で横浜に到着したことが確認されており、横浜居留地20番Cに身を落ち着けて、日本での活動を開始している⁴⁾。明治6年(1873)1月1日から東京・芝愛宕町に設立されたフランス語と農学を専門とする迎曦塾にフランス語教師として勤めた。5月、新潟町戸長鈴木長蔵から新たに設立する医学校を併設する病院の医学教師への就任が要請され、翌6月、新潟へと赴任の旅に着いた。明治7年(1874)5月、私立新潟病院での一年間の任期を満了して、群馬県の富岡製糸場に勤務することになり、新潟の地を離れ、富岡へと向かっている⁵⁾。富岡製糸場には明治8年(1875)末まで勤務したが、その後、一時期、横浜フランス公使館附医師を務めた。明治9年(1876)2月から、横須賀造船所にフランス人医師 P・A・L・サヴァチェの後任として勤務したが、明治11年(1878)4月、横須賀造船所を退職し、フランスに帰国した。

フランスでは一時郷里で開業していたが、やがてマゼールに移り、1896年1月1日、死去した。

2. ヴィダルが実施した温泉調査

ヴィダルが実施した温泉調査を列記すると、次の通りである。

(1) 明治5年(1872)10月(同行者はダベ歩兵隊長・デグロン郵便局長・ジェラルド卸売商)

箱根温泉郷(塔ノ沢温泉・宮ノ下温泉・堂ヶ島温泉・底倉温泉・木賀温泉・姥子温泉・芦ノ

湯温泉)と熱海温泉

- (2) 明治7年(1874)5月(同行者は通訳荒井宗懿ほか1人)

東山温泉と津川町近郊の温泉

- (3) 時期不明(同行者不明)

磯部(上磯部)温泉

- (4) 明治8年(1875)5月(同行者不明)

草津温泉・川原湯温泉・軽井沢町近郊の温泉

これら4回の温泉調査でヴィダルが実施した調査は、温泉水の様相(色調・温度・臭い・味・透明度)と温泉の立地環境や施設(旅館・浴槽)の詳細さらには温泉客の入浴の様子など細部に及ぶものであり、通信会員として、その概要を本国の学会に報告している。またヴィダルは調査地の温泉で資料を採集し、箱根温泉郷(塔ノ沢温泉・宮ノ下温泉・堂ヶ島温泉・底倉温泉・木賀温泉・姥子温泉・芦ノ湯温泉)と熱海温泉での調査資料は横須賀造船所の一室を借りて、ヴィダル自身の手で成分分析を実施している。さらに草津温泉・川原湯温泉・磯部温泉での調査資料は、フランスのトゥールーズ大学理学部長で医学校長でもあるフィロ博士に送り、化学的な成分分析を依頼している⁶⁾。これらの調査成果を基にして、日本の温泉についての総括的な見解をまとめたものが、明治8年(1875)7月、富岡製糸場へ勤務した時期に発表した報告「日本の温泉」である。

3. 「日本の温泉」について

ヴィダルの報告「日本の温泉」は『Gazette des eaux』(水の雑誌)No.923(1876.8.17), No.924(1876.8.24), No.925(1876.8.31)に分割掲載されたものである。なお本文中の()はヴィダルが、[]は訳者が付したものである。

【訳文】

日本の温泉

富岡(日本)1875.7.20

この2ヵ月来、私が数行の文章をまとめようとした時、ちょうど水浴をする季節の只中となった。フランスでは1年の中で特に田舎や都会から温泉や海へと出掛けるシーズンであり、日常の仕

事での疲労や心配事の中で健康管理を中断して、悪化した健康の回復と気分転換を図ることに目的があった。

ところで、この国でも物事はほとんど同様に起こる。それは模倣の精神としか言うことができない。それが我国における利用法のような思考を持たない住民のいる日本という国だ。あまりにも遠いこの国でも、多くの温泉施設が開発されて存在する。フランスと同じ目的と情熱で人々が集まり、恐らく読者の何人かに興味を持たせる詳細が提供できるだけでなく、かなり面白いものになると明確に思われた。

しかし、日本ではフランスと同様な様式で物事が起こると言いながらも、私はその内容と形式の話しか聞いたことがない。ともかく、日本人もヨーロッパ人のように、ある人は必要に迫られた治療目的で、またある人は物見遊山を目的として、しばしば多くの温泉を訪れている事実を述べたい。その類似点についての言及は止めにして、そのほかの利用法は完全に異なるものである。

何よりも、日本に関しては、海水浴の問題は無視しなければならない。実際、盛夏の時でさえも、通例、非常に透明な海や川へ水浴に出掛ける日本人を見たことがなく、多くの島から成り、ぎざぎざな鋸歯状の非常に大きく広がった海岸線を示し、熱帯から北上する暖流が流れる広大な列島である国にしては、とても特異な事象である。この点からすると、私は新潟で唯一の例外を見たことがある。それは1873年7月満月の日のことで、年齢、性別に関係なく、人々が海岸に集まった⁷⁾。民間信仰によれば、その日、重病を除いた全ての人は海水に身を沈めると説明を受けた。だが、翌日になると、海岸は以前と同様に人気がなくなる。仮に日本人が冷水を恐れるのだとしても、反対に高温とも言える温泉では時を過ごす。どんなに貧しい村でも公衆浴場のような施設や旅行者が到着した時に入浴する簡素な宿屋があり、家族は浴室で寛ぐ。

こうした訳で自然の温泉が鉱水化していても、いなくても、ずっと流行しているものと判断することができる。

日本では至る所で火山活動の痕跡に出合い、そして今でも活動中のものがあり、人々に対して非常に多くの温泉とあらゆる種類の鉱泉を提供する。その多くが開発されている。事情により、今まで私は12ほどの温泉しか訪れることができなかったが、この国での利用法に対して、かなり正確に理解をするには十分である。

まだ日本人は水理学について何の思考もなく、各種の温泉についていかなる科学的区分も確立していない。そして政府はやっとヨーロッパ人学者にいくつかの温泉の研究を始めさせた⁸⁾。今のところ、俗称として、温泉のことをユ(湯)と呼び、それは単に熱い水のことを意味する。転じて、低温の鉱水でも同じように適用される。ただし、長年の経験による成果と迷信から、多くの温泉には温度について特徴があると考えられている。従って、彼らによるとこれらの温泉は、外傷や腸の疾患や眼炎等に対して特性がある。確かに、経験的な認識の中にはしばしば真理の核心が存在するが、多くの場合、無知な大衆の偏見にしか、その存在理由はないと考えられる。そのようなことが、評判の高い温泉の中にも存在する。(江戸の北西約50リュウ⁹⁾に位置する草津温泉) 眼の疾患に最も有効であると指摘されている温泉が私に知らされた。その名をメノユ〔目の湯〕と言い、別の豊富な源泉から5、6メートルの所で湧出するが、全く異なった特徴を示す。しかし、私は温度(65度)、味、臭い等で二つの源泉にどんな違いも認めることはできなかった。私が使用したいくつかの試薬は同一の反応しか示さず、そこで私は二つの源泉における作用の多様性は日本人の想像力の中でしか存在しないものと考えようとした。

この点に関しては、我国の最も優れた化学者であるトゥールーズ医学校長で理学部長であるフィロ博士¹⁰⁾に、これらのサンプル水を送った結果により、近いうちにある確信を持つことになるだろう。博士はこれらの研究を無償で引き受けてくれている。

想像でしかないが、日本人にとって、別の特色があると考えられているいくつかの温泉はまだ信頼感がある。それらはしばしば鉱水化した形跡が

なく、ただ非常に高温となるだけの似たような反応しか示さない温泉が報告されている。例えば、私が見たものでは、江戸の南西24リュウにある同一の峡谷に位置する温泉群である。(塔ノ沢・宮ノ下・堂ヶ島・底倉・木賀温泉) その上、これらの温泉は共通の起源とそれぞれの特徴のある源泉に由来するもので、さらに食物までも全く変わりはない。(日本人によると) そこには皇室や上流社会の人々がよく訪れている。

実際、日本人に認められた温泉は鉱水化が付随的なものと思われ、それはおそらく冷鉱泉として、非常に平凡な評価しかない。さらに、現在の居住地とあまり離れていない所に、素晴らしい冷塩泉があり¹¹⁾、1リットルに対して35グラム以上の塩分を含み、強烈な炭酸の放出により、大きな泡が沸き上がっていた。しかし、その温度は14度しかなかった。それでほとんど完全に無視されて、唯一、数人の周辺住民だけが下剤としての特性から、時々飲み、あるいは沸かして入浴した。

従って、日本人にとって、とりわけお湯は重要であり、まさに夏の最も暑い頃でも、海や近隣の川で、あまり冷たくなくかつ心地の良い水浴よりも、むしろ多くの時間を自宅の風呂の準備するための燃料を集める方を好む。自然、地下から湧き出る温泉を好むが、自然の法則と能力については無知で、地球内部の非常に高温について無意識である。あらゆることから推して、沸かされたこれらのお湯は神の庇護者の奇跡的な表現のように見られる傾向にあり、同様に地方の良く効く神に敬意を表した寺社が、温泉の傍に建設され、感謝の意を表することを欠くことがない。さらに、いかに無知であっても、物理学的な性格外での自然水と鉱水化した温泉の違いによる持病の回復と緩和を確認することができる。

そこで全く自然な疑問を紹介する。日本人は必要不可欠な科学的な概念を欠き、結果として、きちんとした管理体制を設けることができず、合理的な医療制度もないので、温泉からどのような利益を引き出せるのだろうか？ また彼らの使用法はしばしば有効というより有害ではないだろうか？

管理体制と医療制度については、これまでフラ

ンスと類似したものが存在する例を見たことがないのは確実であり、規則や秩序もなく、さしあたりの指針は入浴者の酔狂と気まぐれでしかない。

有益な助言を与えられる日本人医師は1人もなく、ありふれた温泉しか発達していない。化学組成や生理学的有効性の重要度についても全く知られていない。にもかかわらず、温泉については日本人により記述された多くの著作が存在し、利用法についても多くの指示を与えている。誤認や意味のないものも多く含まれ、これらを完全に科学的な思想外で書かれた著作と考えることは簡単だが、他方では、非常に長い経験の結果と言える。要するにヨーロッパでは唯一経験から、鉱水治療法の基礎を築き、理論と解説は自然科学と医学の進歩に応じてしか、成果を生まない。ここ2, 3世紀間、日本人はこうした関係にあり、彼らには有効な実践経験がない。彼らにとって自然科学と医学は依然無益な状態にある。

あまりにも不完全な状況を見捨てず、入浴者の大部分が健康への利益を引き出すために、たびたび温泉を訪れるが、疑いなく、彼らの多くは来た時と同様に帰り、また何人かは悪化している。だが、それは一般的な場合ではない。経験に基づく教訓と伝統的な利用法についての簡単な観察から得られた比較的幸運な結果をいかに説明するだろうか？

組織、風習、制度に通じた時、日本人に頻発する病気の説明は可能になると考えられる。

概して、日本人は頑強な体格ではなく、簡単に貧血を起こす。下肢の水腫、数々の原因と影響による漿膜組織への侵入が非常に一般的である。そして完全に健康であると言明する人にしばしば出会う。最も一般的なものとして観察される体質は胆汁リンパ質である。

通常の疾患に関して述べると、頻発するものは次の通りである。

1. 一般的な筋肉痛や関節痛は普通、リュウマチ性やほとんど慢性化したものである。それらがない日本人はほとんどなく、男女の区別なく、彼等のほとんどがモグサを利用した痕跡を持ち、彼等にとっては痛みに対しての荒療治でも

ある。これらの大いなる頻発は閉鎖的な悪い住居に、一日中、座ったままでいて、夜はいつも冷たい畳の上に寝る習慣、衣服の不足や大気温の突然の変化や水田等の長時間労働により説明される。

2. 胃腸の疾患で、最も一般的なものは胃カタル、食欲減退を伴う消化不良、便秘による食欲不振等である。これらの疾患は米や魚の干物や発酵した塩辛い野菜が基本にあり、一般的に肉や乳製品が欠乏し、果物は早生で酸っぱいものを過剰摂取する。卵と海の魚と蟹と軟体動物がほとんど唯一の新鮮な食料であり、水とお茶と米のワイン〔酒〕が主な飲み物である。
3. 自然の皮膚疾患は確かに富裕層よりも貧しい階層に一般的である。
4. 眼炎、本態性リンパ体質、カタル、突発性や合併症の付属物である肉芽、失明の症例は非常に一般的であり、特にある地方では白内障が珍しくない。

私の個人的な観察によれば、これら4種類の疾患の患者に対して、19, 20の温泉が提供されていると言っても、事実と懸け離れていないと思う。

これらの温泉に関して言えば、化学組成の観点から、確かにあらゆる既知の種類を包含するものがあまりにも多いが、例えば、私の訪れた数は少ないが、それらは鉱水化していない温泉であり、硫黄泉、硫化水素泉（芦ノ湯・川原ノ湯）は恐らく我がピレネーの硫黄泉、硫化水素泉に類似するが、全く異質のものである。（江戸から北西50リュウにある草津温泉）は、最新の分析によると、1リットルに対して硫酸1.34グラム、塩酸0.85グラム、硫化水素を多量に含有し、硫酸カリウム、硫酸ナトリウム、硫化カルシウム、硫酸マグネシウム、硫化鉄1.02グラム、硫化アルミニウム1.18グラム、（江戸から南西18リュウにある海岸の熱海）はそれに塩化カルシウムを付け加える硫酸塩ソーダ泉、重炭酸ソーダ泉等、つまり、冷塩ソーダ泉である。

しかし、私が実見し、収集した情報によれば、まず硫酸泉、次いで塩酸が最も多く利用されている。そして、温泉利用法の理解は難しいことでは

なく、また大きな識別力がなくとも同様で、指標となる多くの疾患に対して、有効な成果を生む。硫化泉と塩泉はリュウマチ、胃腸疾患、皮膚病、貧血、衰弱、リンパ体質等の場合に一般的な療法として適している。眼炎に関しては、思うに、腺病体質と結びつくと慢性的な状態を好転させることになるのを除いて、その頻発をより低下させることが利点となる。従って、温泉を利用する方法の欠如にもかかわらず、実際の利益を日本人にもたらず、より良い管理体制へ導くことが重要で、何よりも経験豊かな医師の助言が有益ではないだろうか？ 全くその逆で、最も幸運な場合でも望むことを手に入れる権利がないので、その滞在でまだ失望しか得られていない温泉の数は多い。更に悪いことに、所謂、痛みの悪化がある。ところで、この失敗は特に温泉の無理解な選択にあり、それは偶然や誤った情報への信頼による選択である。その上、図らずも適当な源泉へと導くことが十分でなく、また適当な使用法の理解も必要であり、そのことはまだ日本人に全く知られていない。

さて、日本の温泉でどんなことが起こるか、次に示したい。

フランスと同様、入浴シーズンは4月に始まり、10月に終わる。そして夏期には多くの入浴者が多種の施設を訪れる。だが、旅行の簡便さと便利さの関係とはどんな違いがあるだろう！

フランスでは鉄道やサスペンションの良い車によって、入浴者は数時間で豪華かつ快適なホテルに入るのに対して、日本の入浴者は脆くでこぼこな道を自らの足によるしかない。ほとんどの施設は未開でアクセスの困難な山の峡谷に位置する狭い盆地に立地している。道はしばしばあまり手入れのされていない狭く切り立ったでこぼこの小道でしかなく、馬と牛が運搬用家畜として利用され、かろうじて通過ができる。しかし、それは旅行に伴う荷物や商品を動物の背に乗せることを奮発した個人や金持ちでしかない。女性の場合しばしば吊るされた強い横木を用いて男達に運ばれる大きな竹のバスケットの種類であるカゴ〔駕籠〕による輸送方法を好む。しかし、ほとんどの

入浴者は徒歩で来て、適当な日程の旅をする。時々、団体で到着するのを見るが、手には杖を持ち、藁のサンダル〔草鞋〕を履き、半球状をした竹の大きな帽子を被り、狭い脚絆の中に足を閉じ込め、そして長い着物をまくり上げる。この旅支度には雨具として使用が予定された蓑や大きな四角い油紙が補われた。帯にはタバコの容器である箱と短いパイプが付けられ、背中の小さな箱には旅行用の全ての荷物が入れられていた。日本人はフランスで温泉を訪れる人々の上品さを連想させることのないようなおかしな身なりで、長い道程を疲れ、お気に入りの施設の玄関を訪れる。

建物は普通の旅館と何の違いもなく、あまり大きなものはなく、常に日本家屋であり、骨組みを瓦と薄い貫板で覆われ、そして地面は竹の編垣で覆われた簡素なものである。昼間は紙の障子、夜には板戸となるが、溝の中を自由に滑る可動式の戸や窓として同時に使用される。日本の住居には、いくつかの珍しい調理用具とバラゼル（火鉢）¹²⁾以外はないので、床の上に広げられる藁の厚い蓑（タタミ）が、全ての調度となる。その外にはどんな家具の形跡も認められない。この蓑は非常に清潔に保たれて、寝台・机・椅子等にもなる。旅館の主人と客が慣例的な挨拶である平伏を交互にして、お互いの額を何度も床の蓑につけた。その後、女中により部屋へと導かれ、これらの女性もっぱら日本旅館の家事の役割を担う。実を言えば、この部屋には個室がなく、事実、旅館は非常に広いものだが、各階には大きな一部屋しかなく、溝を滑る可動式の障子で、客数により、意のままに特別な部屋と廊下が形成される。部屋を集中させようとするのは、障子を指で押すことでしかなく、分割された仕切りはすぐに意のまま消えるか元に戻すことができる。旅行者は一度個室を取れば、帽子と荷物を下ろし、普通はぐずぐずせずに入浴することを急ぐ。日本ではフランスに比べ、この作業は限りなく単純である。実行の詳細に関しては、ヨーロッパ人には必要不可欠と思われる用具一式についても、ここでは浴室の更衣室、浴槽、蛇口は何の問題もない。入浴者が落ち着いた旅館はほとんど源泉の近くに位置する。野外に掘

られた浴槽には各種の大きさがあり、大体は一辺が6~8mで、深さが約1mあり、源泉水はむき出しの溝や竹のパイプによって運ばれる。いくつかの柱が薄い屋根を支えて、雨や日差しに対する浴槽の仮小屋を形作る。四周に対して、床の狭い足場がほとんど水面すれすれに広がる。この素朴な浴槽設備はほとんど常に通りや辻に沿って位置している。入浴者は通行人や暇人の見る眼に晒されることになるが、両者にとって少しも関心事ではない。

入浴する時間になると、日本人は旅館の部屋で次々と服を脱いで、それから身体を拭くための小さな綿布〔手ぬぐい〕を持ち、完全に裸の状態では旅館を出て、浴槽へ向かうが、普通は多くの連れがいる。非常に長い入浴の後、服を着るため、全く無造作に戻る。ヨーロッパ人の目にも、通りを葡萄の葉を前にしたエデンの園の姿〔裸体〕で行ったり、来たりする人々を見ることはすぐに全く興味を引かなくなり、彼らにとって、単純でほどほどのこととしか思われぬ。そうしている間にも、女達が更衣室に行くのは一度も見ることではなく、浴槽の縁で服を脱ぎ、湯から出る時にまた再び身に着ける。大衆の前で服を脱ぐこと、さらに男と一緒に浴槽に身を沈めることがとても粗野なことであるのは言うまでもなく、実際、日本人には公共浴場が現在行われている唯一の方法であり、実を言えば、浴場は一種の池で、年齢や性別に関係なく、隣人や好奇心の存在を気にすることなく、身体を洗い、気ままに寛ぐ。一般的に、浴槽の中で日本人入浴者は気高く真面目であり、何も引き起こさず、また重大な行為を実行する人物のようには見えない。公衆浴場も混浴もなければ無作法もないが、物質的な事実自体が真実であるので、あらゆる慎みのない行為と結びつける思考となる。確かに、このような見世物を最初に見た外国人の心を打つものである。それは浴槽での入浴者の行儀の良さである。礼儀的な規則から逸脱した言葉・視線・仕草に決して驚かされるようなことはない。

公共浴場や共同浴場の種類に加えて、時々、また旅館とその付属屋に所在する個人風呂も存在す

る。しかし、それらは旅館の客と家人だけがその使用を独占する。物事は完全に公共浴場と同じように行われ、結局、非常に珍しいもので、浴槽はとても小さく、仕切り板で完全に隠され、本当の部屋を形成していた。それらは何らかの理由で庶民と一緒に入ることを望まない個人や家族に用意されたものであった。

本来的に浴室は別にしても、シャワーの使用は日本人の非常に温泉好きと温泉施設の偉大なる簡素さの中で完全な一貫性がある。温泉水はパイプや納屋の上にある一種の木樋で運ばれて、3~4mの高さを落ちる。これら全ての方法は水の落下と的になる身体の部分へシャワーを受けることになる。時間的な限界は入浴者の忍耐力による。

日本人は稀な例を除いて、決して温泉水を飲むことはなく、入浴することだけに満足しているが、気安めにはそれを行っている。彼らは少なくとも1日に2回ほど入浴し、しばしば2時間ほど浴槽の中に留まる。時々、しばらくの間、まわりを取り囲む板の上で寝込み、起き上がり再び浴槽に身を沈める。既に述べたように、その温度は常に非常に高温であり、私はこれまで40度以下のものを見たことがなく、多くは44度から46度と異なるものである。草津で見たように、浴槽は源泉(温度は64度から67度である)に非常に近いので、温泉水は道中で十分に冷やされることなく到達し、そして50度、それ以上に達する。温度は耐え難いものであり、日本人にとっても同様である。そこで、入浴者は温泉水を冷やすため、非常に簡単な方法を使用するが、かなり興味深い場面を提供する機会となった。10人ほどが、操縦者や扇動者のように使用する板を持ち、浴槽の縁中央に押し当てて、全力で水を叩き、そして揺り動かし始めた¹³⁾。労役への励ましのため、叫び声を上げた。この間、残りの同伴者はまわりにしゃがみ込み、水は至る所に撥ね上がり、厚い煙から硫黄の強い臭いが発散していた。完全に裸体である人々の全集団を半透明な雲のように包み込んだ。そしてほとんど独創的な見世物が生まれた。それは演者と観客による死の舞踏の一種を呼び起させた。

温泉に費やす時間の外に、普通、日本人は庭の上に座り、キセルを吸うこと、お茶や米のワイン〔酒〕を飲むこと、散策、遠足、あらゆる種類の遊びと娯楽に時間を費やす。完全には知られていないが、要するにフランスでも温泉は人々の娯楽であり、余暇として時間を費やすものである。どちらかと言えば、我がカジノやシャンソン喫茶に比較できるが、それらはチャヤ（茶の家）〔茶屋〕と呼ばれている。普通、この家ではコーヒーの代わりにお茶を飲むことによる。しかし、温泉の中では最も人が集まる場所である。建物の中には入浴シーズンにしばしばその才能で職業としての営みを行う歌手と音楽家の人々がいる。

2, 3のグループが集まり、3弦のギター（サミセン）〔三味線〕をまさに古代ギリシャのプレクトロン〔琴爪〕のような独特な堅木の一边で弦を叩き、かなり上手に使用して、伴奏しながら、朗唱するというよりは、むしろ戯曲の一節や文学作品の部分を歌う。日本人はこの種の音楽の非常な愛好者であるが、ヨーロッパ人の耳には今一つである。

温泉にある程度の期間滞在した後、日本人入浴者は再び旅をするための杖を持ち、来た時と同じ方法で家へ帰る。健康の回復を喜び、全く利益を得られなくても、少しもがっかりすることなく、時間と財力が許せば、しばしば別の温泉を訪れる。

だから、日本は温泉を大きく引き立てる国であり、温泉の数と高品質に対する報告を事欠くことはなく、各地方も素晴らしいが、まだ人目を引く地勢のものは少ない。不運にも、不足する二つの重要事項があり、それは良い交通路と医学的指導にほかならない。勤勉な技術者と医師によって、それらが作り上げられれば、いつかはおそらくそこまで到達することになるだろう。

（医師組合） ヴィダル博士

おわりに

明治期に日本を訪れて、温泉について西洋医学からの評価を与えた人物としては、東京医学校（東京大学医学部の前身）の教授に迎えられ、『日

本鉱泉論』を発表したドイツ人医師ベルツ博士が特に有名である。故国ドイツの温泉保養地バーデンバーデンをモデルとした温泉保養リゾートの拠点として伊香保温泉を政府に進言しただけでなく、草津温泉も広く紹介している¹⁴⁾。

温泉研究という観点では、ベルツ博士の来日以前、富岡製糸場等に勤務したフランス人医師ヴィダルも、明治5年（1872）の来日以降、多くの温泉の調査を精力的に実施して、それらの成分分析ならびに医学面からの見解を提示している。ヴィダルが調査した温泉は10ヵ所以上に及んでいるが、これらの調査成果はフランスの学会での発表であったため、日本において、その業績はほとんど知られることがなく、従って、これまで紹介もされないまま、ヴィダルの先駆的な温泉調査は評価される機会を得ず、今日まで百年以上の歳月が過ぎた。

今回、ヴィダルが発表した報告「日本の温泉」を訳出して、その温泉調査の概要と医学的見解を紹介してきた。本稿がヴィダルの実施した温泉調査についての再評価に繋がる機会となればと考えている。訳出にあたり、各温泉の成分や医学用語について、門外漢のため、ヴィダルの意を尽くせない部分も少なくないと考えられる。今後こうした点について、さらに修正を加えながら完全なものにしてゆきたいと考えている。諸先学の御教示をお願いしたい。

註

- 1) 澤護『お雇いフランス人の研究』231-252, 敬愛大学経済研究所, 千葉, 1991
- 2) 蒲原宏 清水陽人 オーギュスト・アルマンゴーガストン・ティシニエ『フランス人医師ヴィダルの生涯と日本』新潟雪書房, 新潟, 2003
- 3) 須長泰一「ヴィダルの箱根温泉郷・熱海温泉紀行—フランス人医師による明治五年の温泉調査」『温泉』770・771, 2003
須長泰一「ヴィダルの上州温泉紀行—富岡製糸場勤務のフランス人医師による温泉調査」『ぐんま史料研究』17, 19-36, 2001
- 4) 註1)と同じ。
- 5) 須長泰一「フランス人医師が見た明治初期の日本私立新潟病院初代外国人医学教師ヴィダルの旅行記

- 「新潟から江戸へ(日本)」『日本医史学雑誌』49(3), 501-558, 2003
- 6) Edouard Filhol: Analyse de diverses eaux minérales du Japon. Bulletin de la société de sciences physiques et naturelles de Toulouse. 184-196, 1875
- 7) 七夕の民俗行事と考えられる.
- 8) ヴィダルはすでに大学南校・開成学校等(東京大学の前身)でフランス語と化学・究理学を教えたH・X・マイヨが草津温泉の分析を実施していることを言及している.
- 9) 1リュウは約4キロメートル.
- 10) 註6)と同じ.
- 11) 群馬県磯部温泉のことと考えられる.
- 12) 戸外で使う金属製のコンロを示すスペイン語である.
- 13) 群馬県草津温泉における湯揉みの光景と考えられる.
- 14) 中澤兆三『ベルツ博士と群馬の温泉』上毛文庫, 前橋, 1990